

世界と議会

World
and
Parliament

尾崎行雄記念財団
www.ozakiyukio.jp

2015 秋冬
合併号
OZAKI
YUKIO

特集：日本の議会政治の未来

尾崎財団会長就任記念講演

「議会政治の未来—尾崎行雄と歴史に学ぶ」／大島 理森

弔堂塾講義録

「政治と人間学—論語に学ぶ」／長峯 基

NPO法人弔堂香風

第20回弔堂読書感想文コンクール

連載「尾崎行雄伝」

第三章 文筆生活

IPSJ

国連の報告書、テロ対策での女性の役割に注目



『世界と議会』 (秋冬合併号) 目次

罌堂言行録 (2)

特集：日本の議会政治の未来

尾崎財団会長就任記念講演

「議会政治の未来—尾崎行雄と歴史に学ぶ」 大島 理森 (4)
(衆議院議長・尾崎財団会長)

罌堂塾講義録

「政治と人間学—論語に学ぶ」 長峯 基 (10)
(元参議院議員・長峯学園さくら幼稚園理事長)

NPO 法人罌堂香風

第20回罌堂読書感想文コンクール (21)

「尾崎罌堂について」 海老原 百慧子

「尾崎罌堂を知って」 戸上 佳紀

連載『尾崎行雄伝』 第三章 文筆生活 (24)

尾崎行雄を全国に発信する会

第13回「尾崎行雄(罌堂)杯演説大会」 (39)

IP SJ

国連の報告書、テロ対策での女性の役割に注目 (40)

罌堂塾ブックオブザイヤー 2015 (44)

財団だより (46)

知識経験の蓄積ほど尊いものはない

人間は、齢を重ねれば重ねるほど、その前途が益々多望なるべき筈のものだというのが、私の最近の人生観である。人間にとっては、知識と経験ほど尊いものはないが、この二つのものは年毎に増加し、死の直前が二つ共最も多量に蓄積された時期である。故に適当にこれを利用すれば、人間は、死ぬ前が、最も偉大な事業、または思想を起こし得べき時期であるに相違ない。

戦争の勝敗は、最後の五分間で決するというが、独り戦争のみならず、人間一生の成敗は、すべて最後の五分間で決するのである。人生は徹頭徹尾、平和的戦争だといってもよい。

家康は、長生きをして、大いに知識経験を蓄積し、且つ死に際までこれを利用したから、徳川幕府二百五十年の基礎を固めた。秀吉は若死をして、知識経験の蓄積が足らなかった上に、あまりその利用法を考えなかったから、豊臣

氏は、二代にして滅亡した。古来、継続的大業を成したものは、多くは長生きをした人々である。以て長い間に蓄積した一身の知識経験と、死に際までのその利用が、如何に大切なものであるかが了解出来るであろう。

近来、人生は四十歳からだと言く書物が出版され、また有名なショー翁の如きは、六十歳以後が、最も貴重有益な時期だと唱えているそうだが、私は人間は、幾歳とは限らず、歳齢を取れば取るほど、貴重有益になると思っている。但し、精神的自殺を遂げて、耄碌もうろくしては駄目だが、前記の人生観を確信すれば、普通の人間は、死ぬまで耄碌すべきものではない。世の耄碌者を点検するに、多くは皆「我が事既に終われり」と考え、前途に何等の希望も持たない連中に限るようだ。

「死」は何人にとっても人生の終末であるが、その「死」ですら、楠木正成の如き死に方もあれば、また権助の首く

くりの如き死に方もある。近年の事例でいえば、爆弾三勇士の死と痴男痴女の情死の如き相違がある。しかしてその風教上に及ぼす差異は、同じ人類の「死」とは思われなほど懸隔けんかくする。

されば人生の終末たる「死」ですら、その方法によっては、六、七十年の久しき間に与え得なかつた功益を世間公衆に与える事も出来、また自己の名声を不朽ならしめる事も出来る。

右等の事実によつて考える時は、人間は最後までその希望を継続しなければならぬ筈のものである。過去はすべて準備時代であつて、人生の本舞台は、何れの時においても現在以後に在るのだ。七十になつても、八十を越えても、

なお今日以後をその本領と見て、その残年を送らなければならぬ筈だ。

二〇一四年(平成二十六年)
『人生の本舞台 復刻版』

より



昭和22年、新橋にて選挙応援演説

昨日まで

ためせる事も

見し事も

明日往く道の

しるべなるべし

昭和九年

尾崎行雄

尾崎財団会長就任記念講演

「議会政治の未来——尾崎行雄と歴史に学ぶ」

大島 理森

(衆議院議長・尾崎財団会長)



大島 理森(おおしま・ただもり)
 一九四六年、青森県八戸市生まれ。七五年、青森県議会議員選挙で当選。八三年、衆議院議員総選挙で初当選(現在十一期)。九〇年、内閣官房副長官。九五年、環境庁長官。九九年、衆議院議院運営委員長。二〇〇〇年、文部大臣・科学技術庁長官。〇二年、農林水産大臣。〇九年、自由民主党幹事長、翌年、副総裁。一四年、衆議院予算委員長。一五年四月、衆議院議長に就任、現在に至る。

■尾崎財団会長に就任して

去る四月二十一日、第七十六代衆議院議長に就任致しました、大島理森でございます。

尾崎行雄記念財団では、時の衆議院議長が会長に就任するという事になっておりまして、こちらでは、第二十七代会長に就任させて頂きました。

尾崎財団を日頃からお支え頂いている皆様の前で、本日こうしてお話をさせて頂くという事を、大変光栄に存じます。

当財団は、憲政の父、あるいは議会政治の父と呼ばれた尾崎罌堂翁の理念を基に設立されたもので、議会政治・民主政治の発展と世界平和への寄与を目的としております。

私自身、衆議院議長という職務に就き、また財団会長としても、改めて、議会政治はどうあるべきか、その中で議長の果たすべき役割とは何か、日々、自問自答しております。

皆様もご存知の通り、今、安保法制の問題がございまして、立憲主義、あるいは憲法というものについて、国民の皆様の中でいろいろな議論がございまして。憲法というものは、私たちの生活の土台であり、国の基礎であるということとを認識しながら、さまざまなお意見が寄せられるということは、私は大変良いことだと思っております。

そこで、本日は今一度、日本の憲政の歴史、議会の歴史について振り返りながら、今後を展望してみたいと考えております。

■明治維新のエネルギー

明治というのは、どういう時代だったのでしょか。いろいろな歴史家、あるいは小説家、特に司馬遼太郎さんなどがたくさん書かれています。私は、この明治という時代に、凄まじいエネルギーを感じるわけです。

一八六七年に大政奉還、七二年に廃藩置県、七四年に「民撰議院設立建白書」が出され、自由民権運動がどんどん高まっていく。そして一八九〇年、明治憲法が施行され、第一回総選挙、第一回議会が実現する。また、これは決して戦争を賛美するわけではありませんが、日清・日露という戦争を戦い抜いた。

この時代におけるリーダー・政治家の、国づくりに懸ける激しい思い、情熱、信念というのは本当に相当なもので、猛烈なエネルギーであったと思うのです。そういう時代を切り拓いてきた一人が、まさに尾崎行雄先生であったのだらうと思います。

私のように戦後生まれの国会議員としては、やはり、日本という国の歴史をつくってきた先人たちの偉大さをつくづく感じ、そこから大いに学ぶべきだと思うわけで

いよいよです。

■議会の役割とは

尾崎弐堂翁の議会に対する言説を見てみると、当時の議会に対する強い期待と同時に、期待するからこそ、なかなか理想に届かない議会の現状を批判しているのです。

議会というものが、実質的に国のあり方を決める最高の機関であって、そこで発言し、議論し、決定していく政治家一人一人が、しっかりしなければならぬんだ、という厳しい批判が投げ掛けられています。

これは、明治憲法下でも、また今の日本国憲法下でもいえることです。日本国憲法では、「国会は、国権の最高機関であり、国の唯一の立法機関である」と定められています。法律の制定や、内閣総理大臣の指名、政府提出の予算の議決、条約の承認など、国民に直結する大切な役割を担っているわけです。

そして、その決定を誰がするかと言うと、国民の皆様から選挙で選ばれた国会議員がするわけですね。われわれ議員一人一人が、その責任と重要性を常に自覚して、議会に臨まなければならない。

弐堂翁は、次のように言っています。

そして、尾崎翁のように、本当に命を懸けて発言し、行動していたわけですよ。特に、強い信念を持った尾崎翁の言葉には、魂が宿り、多くの国民、また政治家にも影響を与えました。あの有名な弾劾演説は、皆様もよくご存知のことと思います。

「彼等は常に口を開けば、直ちに忠愛を唱え、あたかも忠君愛国は、自分の一手専売のごとく唱えておりますが、そのなすところを見れば、常に玉座のかけにかくれ、政敵を狙撃するがごとき挙動をとっているのである。彼等は玉座をもつて胸壁となし、詔勅をもつて弾丸に代えて、政敵を倒さんとするものではないか。」

まさに本質を突く演説です。尾崎翁のように、命を懸けた言葉には気迫があります。力があります。最近の政治家は言葉に重みがないなどと言われることもありますが、立法府は言論の府です。議員が発する言葉一つ一つが重要な意味を持つ。そのことを議員はしっかりと念頭において、国会で議論していかなければなりません。

■国会議員は国民の代表

国会議員というのは、地域の代表ではなく、国民全体の代表ということが憲法に書かれております。もちろん、私たち議員は、それぞれの地域の選挙民によ

「一般人民から選ばれた代表が一堂に会して会議を開くのは、何のためであるか。いうまでもなく、それらの代表が、どうすれば国家の安全と繁栄が期せられるかという立場にたつて、思う存分に意見をたたかわし、これを緊張した各代表が、何者にも縛られない完全に自由な良心を持って、議案の是非善悪を判断した結果、多数の賛成を得た意見を取り上げて、民意を政治に反映させるためである。」

こうした指摘、あるいは教えを、今を生きる政治家もしっかりと噛みしめなければならぬ。私は今、衆議院議長として、議員一人一人が真摯に議論し、開かれた、わかりやすい国会になることを目指しております。

■歴史から学ぶ

立法府は国権の最高機関——このことを私も含めて、全ての国会議員が改めて自覚をすることが、これからの日本の議会政治において最も重要だと思っております。

日本に議会が開設されて間もない頃は、多くの議員がいろいろな文献を勉強し、他国の議会運営を研究しながら、本当に真摯かつ謙虚な態度で、議会に臨んでいた。そして何より、自ら国会議員としての自覚と責任感を持ち、国づくりの使命感に燃えていた。

って選ばれているわけですから、地域の利益のことも考えなければなりません。地域によって不公平な状態になっていたり、国が関与しなければ解決されないような課題もたくさんあるわけです。ですから、地域のことも踏まえながら、国全体のあり方を考える必要があります。国会というのは、ある意味で、それぞれの利害がぶつかり合う場でもあるわけですね。それをどう調整するか、どこで合意を見つけて出すか——それを真剣に議論しながら決めていく。それが政治というものでもあるわけです。

また、政治家というのは、やはり全ての責任を負う覚悟がなければなりません。国民の代表として仕事をさせて頂くからには、自ら主張すべきことは、しっかりとする。そして、お互いの主張をぶつけ合いながら、最後は、一つの答えを出す、決めるわけです。議員は、そのことに責任を持たなければならぬ。役所に丸投げしたり、行政に責任を押し付けたりするようなことがあってはならないわけです。

■人生の本舞台は常に将来に在り

尾崎翁が残した有名な言葉に、「人生の本舞台は常に将来に在り」というものがあります。私はこの言葉が大変好きで、講演でもよく使わせて頂いているのです。

号堂と号した《憲政の神様》《元東京市長》 に見る政治家像の原点！

keio UP 選書

号堂

尾崎行雄

相馬雪香・富田信男・青木一能編著



定価 2,520円(税込)
四六版 336頁
ISBN4-7664-0794-6

目次		
第一章	尾崎行雄 その政治理念と行動	富田信男
第二章	尾崎行雄の平和思想と世界連邦論	青木一能
第三章	東京市長・尾崎行雄	黒宮時代
第四章	欧米の文献に見る号堂	原不二子
第五章	思い出の数々	相馬雪香
第六章	思い出すままに	
	服部フミ・伊佐秀雄・三宅太郎・小川紫郎・樋口孝治	

発行・発売元：慶應義塾大学出版会

〒108-8346 東京都港区三田 2-19-30 TEL:03-3451-3584 FAX:03-3451-3122

お問い合わせ・お申し込みは下記まで

(一財)尾崎行雄記念財団 TEL:03-3581-1778 FAX:03-3581-1856

号堂（かくどう）と号し、明治10年代の青年時代から昭和29年の晩年まで、議会制民主主義の確立に努力した尾崎行雄。「憲政の神様」と称され、東京市長を10年務め、ワシントンDCに桜の木を贈った尾崎行雄。人権尊重、国際平和の実現のために、藩閥政治、官僚政治、軍閥政治と果敢に戦った尾崎行雄。

欧米、とりわけアメリカで高く評価される尾崎行雄の思想と理念を明らかにし、近親者によるさまざまなエピソードから家庭人としての魅力的な人物像をも描き出す。

「昨日までは人生の序幕に過ぎず、今日以後がその本舞台。過去はすべて人生の予備門で、現在以後がその本領だと信じて生きる」という尾崎翁の人生観です。

私たち国会議員も、常にこの気持ちを持ってはならないと思います。議員個人の生き方としても重要ですが、国と国との関係においてもいえることです。

日本はこれまでいろいろな経歴をしてきました。先人の成し遂げたさまざまな功績、その一つ一つの積み重ねの上に、今という時代があるわけですね。

そうした歴史を、決して軽んずるべきではありません。そうした歴史の教訓、また尾崎翁をはじめ、先人の知恵から大いに学び、それをまさにこれからの国づくりを生かしていく。何を、どう生かすかを含めて、これは国会議員だけではなく、国民の皆様と共に考えながらこれからの未来をつくっていく。それがとても重要なことだと思っております。

■結論を出す責任——「決める政治」

冷戦体制が終わり、自由主義か社会主義かというイデオロギーの対立が無くなった時、日本国内でも、政治・政策が非常に流動的になりました。そして国民の選択や判断も絶えず流動的になる。

さらに、グローバル化が急速に拡がって、深まったことで、とにかく政治というものに「速い決断」が求められるようになってきました。

このグローバル化というのは、政治も経済も文化も、本当に全てのものが影響を受けざるを得ない。そういう時に、「決められない政治はダメだ！」と言われ続けた時もあります。

やはり今、立法府たる国会の責任は何だろうかと考えた時、これは全く私自身の所感でございしますが、まずは、しっかりと大いなる議論をする。そしてお互いの相違点が明らかになったら、今度は合意へ向けて努力をする。そして最後には、結論を出す、決断する——それがまさに政治の責任だと思っております。

「寛にして栗」という諺があります。私は、常に申し上げております。寛大・寛容な気持ちと同時に、締めるところは締める、律していく気持ち、この両方を持つていなければならぬ。

衆議院議長として、また、この尾崎行雄記念財団会長として、以上の点を心掛けて頑張りたいと思っております。本日は誠にありがとうございます。

(了)

「政治と人間学——論語に学ぶ」

長峯 基

(元参議院議員・長峯学園さくら幼稚園理事長)



長峯 基（ながみね・もと）
一九四一年、宮崎県都市に生まれる。一九六五年に福岡大学薬学部を卒業、山之内製薬に入社する。一九七九年に宮崎県議会議員に初当選、以後四期を務める。一九九〇年には宮崎県議会副議長に就任。一九九五年七月、第十七回参議院議員通常選挙に自由民主党公認で宮崎県選挙区より出馬し初当選。総理府総括政務次官などを歴任する。現在は福岡大学薬学部非常勤講師、論語指導者育成塾（安岡定子塾長）第一期生としても活躍中。

(1) 論語との出逢い

小淵恵三総理（第八十四代内閣総理大臣）のときに、総理府総括政務次官、今でいう内閣府副大臣を務めさせて頂きました。小淵先生は、皆さんよくご存知と思いますが、一九八九年、当時、官房長官を務めておられた時、『平成』という元号を発表された方です。

とある慰労会の席で、小淵先生とご一緒させて頂いた時のことです。私は何の疑念もなく、ある事を伺いました。現在の元号、すなわち「平成」というのは誰が命名されたのか。即答でした。「それは安岡正篤先生だよ」と言われたんですね。

私はもともと理系の出身で、本職は薬剤師です。当時は人文学や古典の素養など持ち合わせていなかったものですから、まったく解らなかつた。その時、「安岡正篤って誰ですか」と尋ねたら、「君は安岡正篤も知らんのか」と御叱りを頂いたのを今でも鮮烈に覚えております。

平成の名付け親・安岡正篤先生を初めて意識することになったのは、宮崎県議会議員を四期経験させて頂いて、そして国政（参議院）一期目の出来事でした。

以来、安岡先生のことを政務の傍ら、勉強するようになりまし。本格的に安岡先生の教えを辿るようになつ

たのは国政の職責を退いてからですが、かれこれ六七七年になります。東京・銀座で「安岡活学塾」という論語塾があることを知り、そこで勉強の機会を頂くことになりました。

塾長は安岡先生の二男・正泰さんまさやす。ペリカン便で有名な日本通運の重役をしておられまして、定年で経営を退かれてからは安岡活学塾の塾長をされていました。朝の七時くらいからの早朝講義で、三十分くらい安岡正篤先生の実績とか、小さいころ親父からこういうふうに言われたとか、いろいろそういうお話なさいます。

安岡活学塾では、ご令孫の安岡定子先生も講師を務めておられます。「こども論語塾」の講師として全国を飛び回っておられますが、この定子先生が、お父様の正泰先生に続いておよそ三十分間、論語の素読をなさいます。

素読というのは、皆さんご存知ですか。先生がまずお読みになって、それをみんなで口ずさむというのが素読ですね。

「義」とは何か。そして平和の「和」とは何か。そういう言葉の成り立ちや意味、そういう日本語の根幹をなすものを毎回お話し頂く機会に、五年間通いました。そのなかで「論語というのは凄く大事なものだ」ということ

を、私なりにひしひしと感じました。

『経世瑣言』という安岡先生のお書きになった本があります。その中に、人生で大事なことが三つあると記されています。一つは、まず「心に喜神を持ちなさい」。悩みや苦しみや矛盾を感じても、すべて喜びに変えていく。そういう、喜神を持ちなさい。二つ目に、「この世に生を受けて生きていくことに心から感謝をしなさい」。そして三番目に、「自分のためだけでなく、陰徳を積みなさい」。人からほめられなくてもいいから、塵を一つ拾うでもいい、何かいいことをするように心がけなさい、というようなことを言っておられます。

(二) 安岡正篤先生と神渡良平先生

安岡正篤先生のことを知ろうと思つてインターネットで調べ物をする、必ずと言つてよいほど「神渡良平」という名前が出てくるんですね。

私は非常に興味をもちまして、神渡先生の講演会にも何度となく足を運びました。そしていつの間にか友達になりまして、人生の妙味を感じております。

私と同じ九州の出身なんです。九州では一番の難関といわれる九州大学の医学部に入り、途中で世界を旅して回る

「経営者として企業のかじ取りをするにせよ、政治家として国政を担当するにせよ、少なくとも上に立ち人を動かして仕事をする人は、自分が薄っぺらな人間ではだめだということを感じておられるのではないのでしょうか。そこですぐれた人々の事例や生き方を読み、自己の胆力を養い人格を高め洞察を高めたいと思う、しかしそういうことの指南の書はそうは多くありません。だから勢い、安岡先生の本が読まれるのではないのでしょうか。」

ということが書いてあります。

安岡先生の教えを改めて現代に蘇らせたことで、神渡良平さんは世に出ました。ですから彼の講演はほとんど、安岡先生の話です。最近では、中村天風の話をよくさらいます。中村天風という名前をご存知の方はどれくらいいらっしゃるでしょうか。ご存知ですね。この中村天風の話も面白いですよ。

無限の不動心、積極性。中村天風先生の言葉で私が大好きなのは、「政治家は誇りを、実業家は利益を、そして学者は理想を志して生きるべし」という言葉です。

政治家は誇りを、実業家は利益をとというのは解りますよね。学者は理想を。今度の憲法改正問題でも学者は理想ですね。賛否両論あると思いますからどちらでもよい

ようになって。医学の志望からジャーナリスト、新聞記者に転じて、以来作家として活躍されています。

ところが三十八歳の時に脳溢血で倒れまして、その時にこの『経世瑣言』に出逢い、それから安岡正篤を研究するようになりまして。研究の成果を『安岡正篤の世界』という本にまとめられて、これがベストセラーになったんですね。安岡先生の本は難しいですけども、これは実に解りやすい本です。皆さん方も、安岡正篤という人物を知るときかけとして、ぜひお読みになったらよいと思います。

この本の三二頁に、「安岡ブームの意味するもの」という項があります。安岡先生のお書きになったもので、『運命をつくる』が十二万七千部、『運命をひらく』が七万部、『論語の活学』というのが四万部、『人物をつくる』が三万と五百部、『人物を集める』八万部、『安岡正篤とその弟子』二万六千部、『東洋の心』九千部、『活学』第一部から第三部とあるんですが、それが一万部。『易学入門』が二万三千部、『朝の論語』が二万部、『老荘思想』が二万一千部、平成二年六月現在です。つこう約六十万部、それだけこの安岡先生の本が売れているということですね。

関西における安岡教学の普及に努められた住友生命名誉会長の新井正明さんはこう述べています。

「義」や「理」よりも「利」が先行する政治家が多い世の中で、政治家は、いや政治家こそが誇りを持ちなさいと言っておられるわけです。天風先生の本を読んでいると、やはりその根底には論語があるんですね。

(三) 論語と教育

日本では聖徳太子の十七条の憲法にも「論語」が入っております。飛鳥時代、六百年くらいでしょうか。千四百年くらい前から日本には論語が入っています。

先だって、岡山県で山田方谷やまだほうたけに関するシンポジウムがあった時のことです。下村（博文）文部科学大臣にお会いした際にお話をしたら、これからは学校でも論語を採り上げますとのことでした。

小学校や中学校でも本格的に、論語をやるという文部大臣のお考えでした。ただ、論語を教える人がいないのです。戦争に負けて、学校教育の場から論語が、それと童謡が完全に消えました。どちらも美しい言葉が散りばめられています。童謡に関しては復活の動きがここ数年、全国で盛んになってきています。論語も素晴らしい言葉なので、復活をしようということでした。

ところで、四大聖人というのは、皆さんはご存知でしょうか。ソクラテス、釈迦、孔子そしてキリストが、四大聖人と呼ばれています。

宗教か哲学（実践哲学）に基づくかたちで、この四人は挙げられています。いずれもおよそ二千年から二千五百年以上も前にこういう人たちが生まれた。考えてみるとそれ以降、そんな偉い人は生まれていないんです。

今でもやはり、ソクラテスの考えか、御釈迦様の考えか、孔子か、キリストの教えを、我々は学んでいるということなんですね。宗教に関しては信仰の自由というものがありませんから、これはもう自由でよいのですが、ぜひ哲学と実践哲学は学びたいものだと思います。

それで、少しだけ論語の話をしようと思います。本日、論語の本をお配りしました。まず一つお聞きしたいと思いますけれども、皆さん、親孝行はしたいと思いませんか。したいですよ、ね、親孝行。一番の親孝行はなんだと思いますか。論語に、こういう一節があります。

子曰わく、父母は唯其の疾を之れ憂う。

定子先生が子どもたちにおっしゃるのは、大きく二つです。一つは、「自分で考える人間になりなさい」。園児にです。

一つは、「自分で判断する、自分で考える。人がいじめるから私もいじめる、そうじゃない。人がどうするかではなくて、自分で考える人間になりなさい。そういうことを、年齢に関係なく教えて下さるんですね。

そしてもう一つは、「いい言葉を覚えなさい」。いい言葉をたくさん浴びなさい。御父兄にも言います。心に響く、いい言葉を子供たちに覚えさせることを幼児教育でやっておりますけれど、よい言葉を聞いて育つと、本当にまっすぐ成長する。そうしたことを実感しております。

(四) 「知る」「好む」そして「楽しむ」

定子先生の本の中に「知る・好む・楽しむ」という項があります。これも皆さんで、一緒に読みましょう。

子曰わく、之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。

これも凄い言葉です。知好楽と覚えて下さい。本にも

父母はただ、その病をこれ憂う。つまり、子が元気だということが一番大事なんです。ね。偏差値が高いとかね、いろいろ期待はしますけれども、親にとっては子供が元気だということが一番なのです。

論語にはこういう言葉がたくさん、簡潔明瞭に書かれています。ですから人生の書とか、迷った時はいたい論語に頼ります。論語を読み、噛みしめ、実行していくことが人生の難局を解決してくれると思います。皆さんにお配りしたのは、安岡正篤先生のご令孫、安岡定子先生が書かれた『子や孫に読み聞かせたい論語』という一冊です。皆さんに読んで欲しいと思います、今回お配りすることに致しました。

私は現在、宮崎県都市で幼稚園の経営に携わっており、子どもたちの未来を作ることに取り組んでおります。だからこそ、安岡定子先生にも年に五回、都城へ来て頂いております。そして年長組、五歳前後の子どもたちに素読を教えて頂いております。

安岡先生がいらっしゃる以外の時も毎月、素読の機会を園の職員と子どもたちと一緒にやっておりますが、この素読を一年間やると、全部覚ええます。凄いですよ、子どもの記憶力というのは。

説明が書いてありますけれども、先ずは知る、好きになる、そして楽しむ。夫婦生活も一緒ですね。結婚する時、相手を知る、好きになる。楽しむ心境にまでいくと本物です。

趣味も一緒です。スポーツも一緒です。私はもう毎日楽しくて仕方ありません。何をしても楽しい。どうでしょうか皆さん。せっかくこの世に生まれてきたわけですから、楽しいものであって欲しいですよ。ならば、どうするかという話ですが、周りの何か、あるいは誰かを変えようと思っても駄目です。自分を変えなければ、自分が変わらなければいけません。

相馬雪香先生の話にもありましたね。まずは自分を変えなさい。相手を変えようとするから、トラブルになるんですよ。自分を変えるようにしたらトラブルは少なくなります。

それから、論語の中で、私が一番好きな言葉、一番大事だと思っている言葉を紹介します。一緒に読んでみましょう。

子貢問いて曰わく、一言にして以って終身これを行なうべき者有りや。

子曰わく、それ恕か。己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ。

子貢しこうというのは弟子ですね。孔子の門下でも特に優秀な弟子ですが、孔子に「先生、一生涯持ち続ける言葉はなんでしょうか」。それに対して孔子はこう答えます。「それは恕でしょう」。「恕」思いやり、あるいは寛容さです。自分がされたくないことは人にしないことですよ、という事なんです。

ある程度人間は知恵があれば、相手はこういうことを言ったら嫌がるだろう、こういうことを言うとうまくだるうという事は解るんですね。それを実行するかしなかなんです。日々の言動の中で、特に夫婦関係や親子関係、職場の中で、相手の嫌がることは言わない。相手がしてほしくないことはしない。最高の言葉ですね。この恕というのは。

私は、安岡先生の本をあちこちでおすすめているんですけども、この本を一生懸命読んで、全部暗記したら素晴らしい人間になりますね。そして出来るだけ実行して頂きたい。言葉が行動に出るんです。

言葉を学ぶと自分の思想が出来ますから、自分の考え

三番目、二五パーセント早く歩くこと。

四番目、進んで話すこと。

五番目、大きく微笑むこと。

この五つは、本当に効果的です。私は三十四歳の時にこの本を読んで、以来ずっと実行しています。玄関に大きな鏡をつけておいて、そこでニコッと笑ったりですね、第三者から見たら変じゃないかと思うかもしれないですけども。

自分の笑顔の一番いいのはどういふのかな。まあ部品や構造は変えられませんがね。しかし表情は変えられませんか。少なくとも、他の人から悪い感じを持たれないように。自信をつけるための五つの行動、覚えておいて損はありません。

それから、またこれが凄いです。「成功する人は人好きのする人である」という一節です。アメリカの第三十六代、リンドン・ベインズ・ジョンソン大統領はこれをメモに書き留めて机の中に入れておいて、ボロボロになるまで何十年も大事にしていたそうです。

私もずっと机に入れて深夜、見つめなおしていました。選挙では落選も経験しましたからね、苦しい時はこれを見るんです。

方、想いを深めるには言葉が非常に私は大事だと思えます。

今日は皆さんで「恕」という言葉を一緒に学びました。もちろん今までもご存知だったでしょうけれども、何か自分にとって嫌なことがあった時には、この一言を思い出して下さい。「恕」です。そうすると、様々な場面で反省の原点になると思います。

(五) 「大きく考えることの魔術」

これは私の人生を変えた本です。デイヴィッド・ジョセフ・シュワルツの『大きく考えることの魔術』。この中から二つだけお話ししましょう。

「自信をつける五つの行動」という項があります。

一番目、前に座るように心がけること。講演会などでも、遠慮して後ろのほうに座る方もいますね。私は一番前に座るようにしています。

二番目、じつと目を見る習慣をつける。じつと目を見つめる。私がじつと目を見つめると逸らす人がおりませんが、理解して頂いているかどうか見るわけですから、頷いて下さいね。はい、じつと目を見つめる習慣をつける。

一、人の名前を覚えることに熟達しなさい。

二、あなたと一緒にいることが苦痛にならないよう、穏やかな人物になりなさい。

三、何事にも心を乱さないような気楽な性質を身につけなさい。

四、自分をひけらかすような人物になつてはいけない。

五、人々があなたとの交際から何らかの価値をうけるとするような幅の広い人物になりなさい。

六、あなたの個性から不和な要素を取り除きなさい。

七、あなたが持ったことのある、あるいは今持っているあらゆる誤解をなくすように真剣に努めなさい。

八、本当にそうすることが出来るように人々を好くことを実行しなさい。

九、成功した人にはお祝いの言葉を、悲しんだり失望したりしている人には慰めの言葉を述べる機会を逃してはならない。

十、人々の精神的な力になってやりなさい。

三十四歳で落選を経験しまして、三十八歳で当選させて頂きました。その四年間、二万軒のお宅を回りました。その間毎夜、みんなが寝た後に、何度も繰り返し読みました。出来るだけこういう人物になりたいと思います。

どんな人でも、人に与える印象というものがありません。ファーストインスピレーションというのは大事なんですよ。特に選挙に出る人は、第一印象で好感を持ってもらえることが大事です。ああ、感じがいいなと思って頂けること。政策も大事ですが、やはり印象、信頼感は大事です。

東洋に論語や安岡先生の活学があるように、アメリカにもこういう、人生の滋養につながる本はたくさんあります。ナポレオン・ヒルの『成功哲学―やる気と自信がわいてくる』とか、いろいろありますよね。ジョセフ・マーフィーの『眠りながら成功する』とか。あれも面白いですよ。本当に、眠りながら考えることが出来ますよ、夢で考えることが出来ますよ。一所懸命に考えていると、答えというか、指標のようなものが夢の中に出てくるんです。

講師の話に耳を傾けるのも良い勉強ですが、本を読むというのもまた一つの学び方です。

(六) 「素心規」、そして「感動」という言葉の意味

国際ロータリーのガバナーを仰せつかった頃に『政治に愛を』という冊子をつくりました。この中から、一

三、乱世ほど余裕が大切である。余裕は心を養ふより生ずる。風雅も却つてこの処に存する。

四、世俗の交わりは心を傷めることが少なくない。良き師友を得て、素心の交わりを心がけやう。

五、世事に忙しい間にも、寸暇を偷んで、書を読み、道を学び、心胸を開拓しやう。

六、祖国と同胞の為に相共に感激を以て微力を尽くさう。本当にこういう気持ちで生きていきたいですね。

これを毎年手帳に書いて写して、ずっと持っています。偶然にも安岡正篤先生の本で再会したのです。致知出版から出ている『安岡正篤 人生信條』という本に収録されていたのです。もしかしたら、三十代の頃に出逢った「素心規」も、安岡先生の何かだったのかも知れません。

ただ、こうして安岡正篤先生の教えに学んで、安岡定子先生の論語の素読を学んでからの出逢いは、言葉に出来ない感動を覚えました。すぐに致知出版の藤尾社長に連絡をして「こういう本が欲しかったんです」と即座に百冊注文しました。そして、私の支持者の人に差し上げました。政治の一線から退いてからのことですが、感動という言葉は文字通り「感じて動く」ということなんで

つお話ししたいと思います。

二ページ目に「素心規」が作ってくれたバックボーン」という項があります。手帳にも常に書き留めている言葉です。これも三十四歳の時、統一地方選に初めて立候補し、一敗地にまみれた時に出逢いました。どの文章も身にしみました。

十年前に落選を経験して、その時以来、私が大事にしている言葉です。その後当選させて頂いて、議会に臨むときも常にこの言葉と共にありました。ぜひ、皆さんにもお分けしたいと思います。

一、禍が福か、福が禍か、人間の私心ではわかるものではない。長い目で見て、正義を守り陰徳を積まう。

これは落選したときには力強い言葉でした。では、失敗したことが福なのか、成功した人が幸せなのか、人間の指針ではわからないですよ。その時だけ喜んでいてもいけない。やはり長い目で見て正義を守り陰徳を積もうということです。二番目以降も続けて参ります。

二、窮困に処するほど快活にしやう。窮すれば通ずる。また通ぜしめるのが、自然と人生の真理であり、教へである。

すね。感じて動く、感じたからには動く。

罌堂塾で学ばれる皆さんは、政治を志す方や、あるいは地域社会のリーダーとしての素養を磨くためにこの憲政記念館に集い、学んでいらつしやると塾長代行の石田尊昭さんから伺いました。政治家を志すもよし、そうでない人もよし。どちらであつても、この「感動」という言葉の意味するところは分かち合いたいものです。

(七) 七十二歳で出逢った『人生の本舞台』

本日のお話では、人間学というよりも、私がこれまで触れてきた本や言葉を中心に、皆さんにご紹介する形でお時間を頂いてまいりました。私が七十三年間勉強したことや色々なことを今日はお話ししておりますけれども、その中で何か一つでも、あるいは二つでも、うんなるほどと、感ずるところがあれば、これ以上嬉しいことはありません。

この憲政記念館で学んでいる皆さんはご存知ですよ、ね、「人生の本舞台は常に将来に在り」。この玄関にある石碑にも刻んであります。昨年、石田さんと、財団研究員の高橋大輔さんが『人生の本舞台』を復刊されました。石田さんの前書きにも、解説がありますね。やっぱ

り「世のため人のため」。私たちが尾崎行雄先生に学ぶとしたら、何よりもそこだと私は思います。

そして「知識経験は金銀財宝より尊い。しかるに世間には六、七十歳以降にはこの貴重なものを利用せずに、引退する人が多い」。何歳になっても、それまでに蓄えた知識経験を未来に生かす、生かし続けることが大事だと。これには大いに励まされました。

尾崎先生の座右の銘はかねてから伺っておりました。ただ、この『人生の本舞台』という一冊の本に出逢ったのは、偶然にも昨年です。尾崎先生が天啓のごとくこの言葉を閃かれた頃と同じ年頃に、私も出逢ったのです。ここにも、新たな発見がありました。

本文中、尾崎先生は孔子と論語についても触れられています。「知識経験の増加と体力の減少」という項を、最後に皆さんと一緒に読んでみましょう。

「孔子は『四十にして惑わず、五十にして天命を知り、六十にして耳従い、七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず』と、言っている。彼もまた私同様に体力の減少する頃は、他の半面において、それより以上の進境がある事を認めているのである。」

この『人生の本舞台』の中で、尾崎先生が論語について触れておられます。ここに、罎堂 尾崎行雄が憲政の神、あるいは議会政治の父と呼ばれた秘密があったと私は思います。尾崎行雄という人は、幼い頃から論語に学び、実践してこられた。父・行正は奇しくも安岡正篤先生の曾祖父・安岡良亮に仕えた経歴の持ち主でもあります。

古来、中国では論語は為政者のための学問でした。どうやって国を治めるか。それがそもそもの論語の原点であり、孔子が目指したものでもあります。だから、『人生の本舞台』で論語の一節が引用されたのも、ごく自然な流れであったのでしょう。

政治家こそ論語を、いや論語に学んだほうがいいとは思っています。今日はとりとめのない話で恐縮ですが、何か一つでも皆さんの心に留めて頂けたら幸いです。以上で私のお話を終わりたいと思います。

本日はありがとうございました。

(了)

第二十回「尾崎罎堂読書感想文コンクール」ご報告

NPO法人罎堂香風（三重県伊勢市、土井孝子理事長）が主催する「尾崎罎堂読書感想文コンクール」表彰式が十一月二十八日に伊勢市の尾崎罎堂記念館で行われました。

同コンクールは尾崎行雄の選挙区でもあった伊勢市の小中学校生を対象に開催され、一九九六年に第一回が開催、今年で二十年目を迎えました。

第二十回読書感想文コンクールは五百九十点の応募があり、二十六名の小中学生が伊勢市長賞や市議会議長賞、教育委員会賞などの栄冠に輝きました。

当財団の「尾崎行雄記念財団賞」も、小学生部門と中学生部門の各一点、計二点の作品に贈られました。ここでは、その二作品を掲載します。



財団賞を受け取る海老原百慧子さん(小学校6年生)



財団賞を受け取る戸上佳紀さん(中学3年生)

【NPO法人弇堂香風 第二回尾崎弇堂読書感想文コンクール】

尾崎行雄記念財団賞

尾崎弇堂について

海老原 百慧子（厚生小学校六年生）

私は、『尾崎弇堂ものがたり』を読んで、尾崎さんはどんなことがあっても自分の意志を曲げない、強くて勇氣のある人だなと思いました。

特に印象に残っているのは、尾崎さんが子どものころ、東京にある日本一の慶応義塾という学校で勉強をしたという希望を強く持ったところです。日本一の学校で勉強したいというのとは簡単に言えることではないと思うし、それだけの学力もいると思うので尾崎さんはそれだけ学力と勉強したい思いが強かったのだなと感じて、私も希望の学校へ行く時には、強い思いを持ってしっかりと勉強したいと思いました。

二つ目に印象に残っているのは、尾崎さんと犬養さんが、「憲政擁護・閥族打破」の運動で東京両国の国技館で開かれた大演説会で来館者が二万人といわれ、大会場も入り切れないほどの人が来たところです。それだけの人を賛同させているのはすごいことだと思ったり、尾崎さんや犬養さんが信用できたからこそみんなが賛同してくれたんだと思って、信用はすごい力を持っていると思ったからです。

三つ目に印象に残っているのは、尾崎さんが英国滞在中、

(丁)

総選挙があつて、日本にいない尾崎さんがみごと当選した

り、川柳を引用したところ、「不敬罪」という罪に問われて東京の巢鴨拘留所へ送られ、選挙戦に四日間の空白が生じたにもかかわらず、伊勢を中心とする選挙民は尾崎さんを当選させたりしたところです。そんなところから、尾崎さんの五十年にわたる信頼は、東条内閣のどんな手段をもってしてもくずれない力を持っているのだと思いました。私も、五十年も尾崎さんのことを信頼し続けていたら少しの罪でもゆるせると思います。当時の伊勢の選挙民の人たちは本当に尾崎さんを信頼していたんだなと思って信頼の深さに感動しました。

そしてもう一つ感動したのは、命をかけてまで熱い思いを持ち、良心で判断し、真実を語り、志をかたく保持し屈しないところでした。それは、尾崎さんの強さであり、勇氣だと思いました。その強さや勇氣があつたからこそ今の平和があるんじゃないかなと思いました。

この物語から、たくさんのことを学びました。信頼の力や良心の強さ、尾崎さんが持っていたさまざまなことです。私も尾崎さんのような意志をつらぬく強くて勇氣のある人になりたいです。それには、勉強はもちろん、人のことも考えて行動できるようにしたいです。

尾崎行雄記念財団賞

尾崎弇堂を知って

戸上 佳紀（城田中学校三年生）

小学生の時、尾崎弇堂について本を読んだり劇をしたけれど、幼かった私にはあまり内容が理解できなかった。けれど中学三年生になり小学校よりも詳しく歴史を学んだことで尾崎弇堂が生き抜いた時代が身近に感じられるものになった。

私の尾崎の印象は何度も選挙に当選したすごい人、というものだった。しかし、幼少の頃の尾崎は病弱で臆病者だったと知って驚いた。なぜなら厳しい世の中をすり抜け、新しい時代を開拓した人間がまさか臆病者だとは思えないからだ。新しい時代を作るには失ってしまう命があるかもしれないのに、ひるまず戦っていったとは幼少の尾崎には考えられないことだろうと思った。政権争いの中でも藩閥や軍閥に屈さず戦っていった尾崎はとても格好良いと思った。

その中で私は戦争を嫌った尾崎が現代社会を見てどう思うだろうと思った。最近、集団自衛権や安保法案などといったことで国会が揺れている。私自身、過去の二の舞にはいけない、戦地で国民を犠牲にしてはいけないという理由でそれらの法案は反対だ。尾崎がもし今生きているならば彼も同じく反対するのではないだろうか。激動の時代を生きた彼に

もちろん今は尾崎はいないけれど私達が代わりになることはできる。尾崎のように自らの信念を持ち、声を上げていけばいい。間違っていることは国民の一人として反対していかなくてはいい。

選挙権が十八歳まで下げられようとしている。私達も近い将来選挙に参加できるようになった。しかし尾崎が過去に普通選挙の運動の先頭に立っていなかったらどうなっていたのだろうか。十八歳で選挙権など考えられないだろう。私は政治に一国民として十八歳から参加できるのは良いことだと思う。しかし選挙の内容を理解していないのに投票に行っても無意味だ。だから私は今からでも政治について考えていくべきだと思う。

新しい時代の先頭を走り続けた尾崎も見知らぬ世界に踏み込む時は不安だったと思う。しかし、信じるもののために走り続けた尾崎の人生はとても濃密なものだっただろう。一人の政治家として、一人の国民として政治の主役をしていた尾崎は尊敬すべき日本人だと思う。私も今回一人の生徒としてではなく、一人の国民としてこれから生きていかななくてはならないと思った。そして尾崎から学んだことを生かして数年後に投票に行こうと思う。そして尾崎のように強い意志と信念を持ってこれから来る新しい時代を生きていきたい。

(丁)

『尾崎行雄伝』

(沢田謙著、一九六一年)

第三章 文筆生活

工学寮は、のちに工部大学校と改称し、今の東京大学工学部の前身である。

これは当時の工部卿・伊藤博文が、西洋物質文明の基礎をなす、工学を奨励するために建てたもので、授業から経営まで、一切が外国人まかせだった。教師も全員西洋人で、講義でもなんでも、英語ばかりであった。

尾崎が、しばらく必要な英語と数学を勉強したのち、どうやら入学試験をパスして、工学寮に入学したのは、明治九年、彼が十七歳の時であった。

一番閉口したのは、教室にしみこんでいる薬品の臭いだった。それが一日中鼻について、せつかく草津温泉で治った頭痛が、また起こった。いろんな実験をさせられるたびに、薬品の変な臭いがかがされる。元来化学が好きなのでなく、ひよんな行き掛かりから、向こう見ずに入ってしまったのだから、すぐに後悔した。

生まれつき体が弱い上に、無理にいやな学問をするので、とうとう病気になるってしまった。在学一年ばかりの間、半年あまりは、学校の病室ですごした。たまたまに教室に出ても、習うものがみんな気に入らない。授業時間にも、彼はいつこう課業を勉強しなかった。

ダイアー教授は毎夜、全校の生徒を大食堂に集めて、学習をやらせた。尾崎も病室にいない時は、やむなく出席したが、二、三時間もある学習時間に何もせずいたら叱られるから、そこで考えついたのが、新聞の投書を書くことだった。

これなら先生が見回りに来ても、西洋人のことだから、何を書いているか分からない。「いつもよく勉強しているな」とほめてくれるので、彼はほくそ笑んだ。そして書きあげたのが「討薩論」であった。

そのころ工学寮は虎ノ門にあった。校長の実権をにぎっていたヘンリー・ダイアーは、帰国後グラスゴウの大学総長になり、国会議員の候補者となった人である。

生まれがスコットランドだから、衣食住をはじめ、すべてがスコットランド式で、校医にも外人を用い、便所まで西洋輸入ものだった。今から思うと、ずいぶん思いきったことをしたものである。

彼はこの工学寮で化学を勉強し、卒業後は、京都の西陣あたりで、染物屋になるつもりだった。ところが工学寮に入学して、化学教室に入ったとたん「こりゃあ大変なところへ来てしまった」と思った。

当時薩摩(鹿児島県)は、ほとんど独立国の状態であった。征韓論にやぶれて帰国した西郷は、私学校をおこし、私兵をやしなうて、勝手なことをしておるのだが、政府は手も出せない。

日本は明治維新で四民平等の世の中になったといっても、事実は、薩長藩閥の専制政治であった。彼はその藩閥政治が、癩しかにさわったので「薩摩討つべし」と、となえたのである。

書きあげた時は、内心彼も得意だった。慶応義塾は飛び出したものの、やっぱり忘れられぬのは、福沢先生だった。さっそくその論文を持っていつて見せると、先生は「こんなものを書く、縛られる(お縄になる)ぞ」と言っただけであった。彼は縛られるのは嫌だが、さてそう言われると、意地っぱりの彼は、そのまま引っこむわけにはいかぬ。思いきって曙新聞に投書した。

「曙」は当時「日々」「報知」「朝野」となるお四大新聞の一つであった。「楠秀」というペンネームで投書したこの論文が、曙新聞にのった時は、彼も思わず会心の笑みをもらした。が、びっくりしたのは、それからまもなく熊本に神風連しんぷうれんの乱が起り、父の上役

の安岡知事も、熊本鎮台司令官種田少将も、ともに殺されたことだった。

「安岡さんがやられるようじゃ、お父さんも無事ではすむまい」と彼は心配でたまらなかつた。事実この神風連の乱では、殺されたり怪我を負ったものがかなり多く、父も襲撃されたのだが、奇跡的に微傷だに負わず、母は行隆、行武、行昌の三子をかかえて、身をもって逃れたというので、彼もやっとなをなでおろしたのであった。

それが明治九年十月で、それから半年もたたぬ十年二月には、西南戦争が起こり、西郷征伐の軍が、九州に渡った。「それみたことか」と、彼は自分の討薩論が実行されたような気がして、はなはだ愉快だった。

彼は西南戦争中に、とうとう工学寮を退学した。これをもって彼の学校生活は終わる。平田塾、高崎と山田の英学校、慶応義塾、工学寮と、あわせて五、六年にすぎぬ学生生活だった。

生まれてここに十八年。彼はこれからどうしようというのか。とりあえず、独学で勉強をつけながら、ひまにまかせて、新聞の投書や翻訳などはじめた。

そのうち福沢先生の『民間雑誌』が休刊になっていた

「しまう」などといひだしたので、わずか五、六回で講義をやめてしまった。

翻訳もさかんにやった。『公会演説法』をはじめスペンサーの『権理提綱』、トレーバーの『米州連邦治安策』、それから『西洋穴探し』など、この時代の訳著である。

それから、『民間雑誌』の同人を中心として「協議社」という会をつくり、さかんに討論会や演説会をやった。そのため彼もしばしば、演壇に立たねばならぬはめになった。

元来言論を、口舌の徒といやし、文章を、千古の業と尊ぶ、漢学思想がまだぬけきらぬ彼であったが、福沢先生に「これからは筆で人民を導くだけではない。口でも教えなければならぬ。演説はどうしても必要だ。せひやれ」といわれて、いやいやながら立った演壇であった。

むしろ演説が上手になろうという気もなく、心で演説を軽蔑しながらやるのだから、義理にも雄弁とはいえなかつた。ただ、自分の思想を知らせる目的で、演壇に立ったのだが、この欲心のないのが、かえってよかつたのだらう。方々から演説をたのまれるようにな

のを、友人たちとともに再興することになった。こうして当時、政治を志す青年が、役人にならぬかぎり、誰でも進むジャーナリズムの道へと、彼もいつしか踏み入ったのだった。

『民間雑誌』の経営方面は、おもに朝吹英二がうけもつたが、同人の加藤政之助、波多野承五郎、山本彦一など、なかなか意気さかんなものだった。

「これまで政治を論ずるものは、みんな羽織袴か洋服だったが、それでは面白くない。民間雑誌は、ハッピをきて政治を論ずる趣旨でいこう」といいだしたのは朝吹であった。

「それはしごく名案だ」と尾崎も賛成した。が、さてハッピをきてみると、どうも彼にはピツタリしない。元来がしかつめらしく、さようしからばの流儀だったので、大いにハッピ連中から笑われた。だがハッピをきて政治を論ずるといふのは、やはり町人論吉をもつて任じた、福沢思想の現れであった。

尾崎はまた一時、本郷湯島の共勸義塾に招かれて、英国史の講義をしたこともあった。しかし生徒がみんな、彼より年上のものばかりなので、彼をばかにして「ゆうれい講義でわからない、語尾がスーッと消えて

った。

そのころ芝のある寺のすみに、海軍士官のクラブのようなものがあって、各方面の名士を招いて講演をきいていた。明治十二年の春、どうしたわけか、尾崎も招かれて、ここで「尚武論」を一席弁じた。それは、国家の盛衰興亡は、尚武の気象の有無によってわかれるということ、歴史上から論じたものであったが、これがやがて、彼の運命を一変させる機縁となるのである。

尾崎がこうしてようやく文筆活動に入ったのは、あたかも自由民権論が、ふたたび猛然と全国にわき起りつつあるころであった。

明治十年に西南の役が起つた時、うろたえたのは、政府ばかりではなかつた。全国が息をのんで、九州の

戦局をみつめた。

それだけに、熊本城の囲みがとけ、西郷が城山の露とさえた時、国民は悪夢からさめた気持ちだった。



「あの西郷の威望と、薩摩の兵児の勇戦をもってしても、武力で政府を倒すのは、やっぱりだめなのか」と知った時、期せずして国民の間に「藩閥政府を倒すには、自由民権運動により、国民の総力を結集するほかはない」という声が起こった。

そして国民の前に、大きくおし出されたのが、板垣退助という人物だった。板垣は天保八年（一八三七）年）、土佐の高知に生まれた。幼名を猪之助（いのすけ）といつた。彼より一つ年下の後藤象二郎の幼名が保弥太（やすやた）で、この「イノス」と「ヤス」とが、近隣きつてのガキ大将で、町内をあばれ回ったものである。

こうした腕白小僧にも、やっぱり苦手はあった。ヤスの一番こわいのが蛇で、イノスの大嫌いなのが汚物だった。だから二人が喧嘩をはじめると、イノスは蛇を投げてヤスをおびやかす。するとヤスはすぐ汚物をつかんで立ち向かう。たがいにこれを武器として、戦ったものである。「後藤の糞攻めには閉口したものだ」と、板垣ものに回顧している。

板垣の父は乾正成（いぬいまさなり）といつて、三百石取りの馬廻役であった。若くして発狂し、役づとめもできぬ身であった。が母は、なかなかの男まさりで、イノスがどんなし付けられたのでもないのに、東西にかけ回って、火の元を注意し、灯火は一切消させ、火鉢にはすべて水をかけさせた。二十歳前後の若者には出来すぎたはたらきだった。

こうして猪之助の人物も、ようやく人に認められるようになった。が、何しろ相変わらずの年少気鋭で、才気をたのんで、長上と争うこともあれば、同輩と衝突することもある。自然と重役に憎まれて、ついには国もとに追い返され、謹慎を命ぜられて、神田の里に、閉居の身となった。彼がやっと本気で学問をはじめたのは、この閉居中である。

板垣がようやく頭角をあらわしたのは、その才幹を老公・山内容堂に愛されて、側用人に抜擢されてからであった。

容堂は若くして、幕府にいらまれて隠居したので、「老公」とか「土佐の隠居」とか言われていたが、実はまだ三十歳を出たばかりの壮年で、相変わらず藩政を見ていた。

そのころどの藩でも、藩内に、尊王派と佐幕派との争いがたえなかつたが、土佐藩は、徳川の親藩にもひとしい間柄だったので、その争いはいっそう酷烈だっ

腕白をしても、決して小言を言わぬ。そのかわり、喧嘩に負けて泣いて帰ると、「男の子は泣くものではありません」と、きびしく叱りつけた。

当時、高知城下の少年たちは南組、北組、上組の三つにわかれて、たえず争っていたが、ある夜、とうとう七十余名の大乱闘になった。むろん子供の喧嘩であるが、この時あいにく、北組のなかにいた藩の重役の子が、右腕を折ったために、問題になった。

しらべてみると、驚いたことに、発頭人は、一番年少の猪之助だった。そのため、しばらく閉門同様になったが、彼はいっそう平気なもので、それをいいことに水泳ぎばかりやっていた。

十八歳の時、彼ははじめて江戸詰めになり、藩邸で生活する身になった。この時、安政の地震が起こった。何しろ藤田東湖までがおしつぶされたほどの急な大地震だ。板垣は、とっさに戸外にとび出したが、突然「しまった！腰のものを忘れた」と叫んで、人々の制止をふりきって、家にとび込んだ。そして、まだガタガタ揺れている藩屋敷から、悠々と、両刀をつかんで出て来た。

それから藩主のご機嫌うかがいを済ますと、誰に申した。ことに、佐幕派といらまれていた吉田東洋が、尊王派の武市半平太の一党に暗殺されてからは、いくたびか血で血を洗うような惨劇をくりかえすのであった。これではならぬというので、ある日、容堂が板垣をよんで相談すると、「承知しました。考えがあります」と答えて、さっそく血気の同志五十人を集めて、武市派の暴力をおさえつけた。彼が藩内に潜勢力（せんせりょく）を持つようになったのは、これからである。

こんな関係から、板垣は一般に、佐幕派のように考えられていたが、彼の本心は、尊皇派に傾いていた。

彼はまもなく江戸詰めになって、築地の藩邸にあること三年、もっぱら蘭学をまなび、夜を徹して洋式の兵学を研究していたが、その間、ひそかに勤皇の志士たちと気脈を通じていた。

そして、はやく土佐藩を脱藩して勤皇運動をつづけていた、陸援隊長の中岡慎太郎と連絡して、幕府討伐の計画を練っていたのである。

そのうち中岡から、しきりに「時局が切迫したから、すぐ出て来い」と、矢の催促なので、急いで京都に出て見ると、なるほど容易ならぬ形勢であった。薩

長の同盟はすでに成り、今にも討幕の兵を動かそうという勢いである。

「困ったことになったよ。老公が、いつまでもああ優柔不断では、土佐藩は、おいてきぼりをくらう。そればかりか、今に朝敵の汚名をきて、討伐をうけることになる」と、中岡は慨嘆した。事実、そのころの土佐藩は悪評紛々たるもので、土佐藩士といえば、志士の間で爪はじきされ、同席すらきられるほどだった。

板垣は中岡の話をじっときいていたが「ようし、それではすぐに帰国して、老公をお諫め申そう」といった。

「じゃが、老公がどうしてもきかれぬ時は…」
「切腹しても、争うまでじゃ」
すると中岡が急に色をなしていった。

「それはいかん！君を江戸から呼びもどしたのは、腹切せんがためではない。おれはそんな犬死には賛成できぬ」

それで、いろいろ相談のあげく、板垣は帰って容堂を苦諫し、もしそれでもきかれない時は、藩論のいかにかわからず、同志を糾合し、独力で討幕の旗上げ

江戸藩邸で、三年の間、洋式の兵学を研究していたのは、むだではなかった。この新兵制が、維新戦争における、土佐藩の活躍のもととなるのである。

こうして板垣は、隠然、藩内における武力党の中心となった。が、藩政の形勢は日に日に非であった。そしてついに、後藤象二郎の建言をいれ、將軍慶喜に、大政奉還を勧告させることになったのである。

この時も板垣は、必死になって反対し、幕府の武力討滅を主張したのであるが、容堂はただ「退助がまた暴論をはく」と、苦笑しただけであった。結局板垣は、大監察と軍備総裁とを、免ぜられてしまった。

軍備総裁の地位をうばわれては、倒幕の義兵をあげることができないばかりか、身の安全さえ風前の灯となった。板垣は突然、窮地に追い込まれた。そこから板垣を救ったのは、伏見鳥羽の戦だった。

戦争になると、藩兵をひきいて出陣しうるものは、板垣のほかはない。のちに、「維新戦争で死んだものは少なくないが、そのために生きたのは、板垣どん、おはん一人だ」と、西郷がいったというが、その通りだった。

まもなく、西郷が総参謀として東海道をくだる。板

をするということになった。

さっそくこの決定をたずさえて、板垣と中岡とが薩摩藩邸の西郷をたずねていくと、西郷は膝をうって「こは大丈夫の一言じゃ。ようござす。おいどんが引き受けもうす」といった。

こうして板垣は、京都の同志にわかれて帰国する際、アルミニウム銃三百挺を買い入れて、高知に帰った。そしてすぐ容堂に拝謁を願って、決起をうながしたのだが、容堂は容易に腰をあげようとしなない。仕方がないから板垣は、かねての計画通り、ひそかに三百人の同志を集めて、これに三百挺の銃器を分かち、京都からの飛報を待っていた。

すると四、五日して、藩庁から呼出しがあった。何事かと出頭してみると、意外にも「大監察に採用する。あわせて軍備総裁を命ずる」というのだった。軍備総裁になった板垣は、これ幸いと、土佐藩の兵制の大改革にかかった。

これまでの兵制は北条流にのっとり、弓槍を唯一の武器としていたのだが、板垣は士格のものから、次男や末子をえらんで、新たに銃隊を組織し、これを兵制の中心とした。

垣は東山道軍をひきいて、江戸に攻め入った。それから上野の彰義隊が討伐されると、こんどは会津征伐を命ぜられた。これはなかなかの苦戦で、討伐どころか、攻めよせきたる優勢な敵軍に対して、今市を死守した時など、ほとんど一死を覚悟したほどだった。

こうして板垣のひきいる官軍は、ついに滝沢峠の險に達した。峠の下は、すなわち会津城である。すると敵軍が、薄暮に乗じて、猛烈に切りこんで来た。窮鼠かえって猫を噛む勢いであった。あわや官軍総崩れと見えた時、板垣は刀をぬいて、そばにあった荷駄を両断して、叫んだ。「退くものはこの通りだぞ！」

これによって、からくも敵兵を、城中に追い返すことができた。

こうしてやっとの思いで、会津城を攻め落としたのであるが、飯盛山にたてこもった白虎隊の少年たちをはじめ、会津兵の勇猛さには、さすがの板垣も舌をまいた。

会津が落城したのち、藩主松平容保は、滝沢村の妙国寺に謹慎していたが、ある日一人の百姓がやってきて、「天朝さまの敵になったとはもうせ、お殿様の今のお暮しは、お気の毒でなりません。せめて、わたし

の手作りのイモなどさしあげたいと思いますが、お許しくださるでございましょうか」といった。

板垣はギクツと胸をうたれた。もちろんこの百姓の願いは許されたが、考えてみると、こんなことをいつて来たのは、この男一人きりだった。

これでいいのだろうか。「会津の武士たちが、あれほどの戦をして、城を死守したのに、領内の民百姓は、まるで知らん顔をしている。もし会津藩の民百姓が、心を一つにして助けたら、わずか五千にたらぬわが軍では、とても勝つことはできなかったろうに。松平容保は、非常な明君だときいていたのに、しかもこの通りだ。これというのも、封建政治の結果である。譜代の恩顧をうけたのは、武士階級だけで、武士以外の民百姓には、なんの権利も自由もない。これでは人民が、領主に、なんの恩や義理を感じる道理がないのだ」

板垣はしみじみとそう感じた。そして、民心をはなれた政府が、いかに微力であるかを、身をもって体験したのである。

こうして板垣は、赫々たる武功にかがやいて、東京に凱旋して来た。いよいよ彼も、政治の中心で、大いして、ふたたび野に下って、時機を待つうち、西南の役が起った。

西南の役は、立志社にも大きな動揺を与えた。なかでも林有造、大江卓、竹内綱、岡本健三郎など、元気のいい連中は、元老院議員陸奥宗光と通謀して、ひそかに銃器を買い入れ、壮丁をつのり、西郷軍と呼応して、大阪城をうばう詭策を立てた。が、板垣は動かなかった。

そうして西南の役が終わり、世がようやく静まるのと、いよいよ、愛国社を再興することに決し、立志社の連中が、それぞれ再興趣意書をふところにして、全国遊説の途にのぼった。時に明治十一年四月、一時鎮火したかに見えた自由民権運動の火の手が、ふたたび全国にあがったのはこれからである。

「用事があるからすぐ来てくれ」と、福沢から尾崎のところについて来たのは、明治十二年冬のある日だった。さっそくいってみると、「新潟新聞の主筆に推薦した古渡資秀君が、赴任後まもなく病死したので、その後任を頼まれている。どうだ君、いかないか」という話だった。

にその志をのばすべき日が来たのだ。

ところがそこに土佐藩から来たのは、「すぐに帰国せよ」という藩主の命令だった。板垣は眉をしかめた。だるうが、藩主の命令とあらば致し方ない。藩主のお気に入りだったのが、身の因果で、こうして板垣は、おいしいチャンスを逸し、藩の大参事として、藩政をとることになった。世にいう「鼻頂の引き倒し」とはこのことである。

ところが明治四年、廃藩置県のが起こると、すでにのべた通り、西郷、木戸、大久保の三人が、鹿児島から上京の途中、高知に立ちよって、容堂に拜謁し、「ぜひ板垣を政府にゆずり受けたい」と申し出たのである。

これには容堂もいやとはいえなかった。こうして板垣はやつと東京に出て、参議に列し、中央政府に腕をふるうことになったのである。

それから後のことは、すでにのべた通りだ。そんな関係から、板垣は同じ武人の西郷と組んで、征韓論をとえ、廟議にやぶれて下野すると、民撰議院設立の建白書を提出し、自由民権運動に転身した。

大阪会議の結果、一時政府に復帰したが、志をえず

新潟は田舎とはいえ、当時の新潟新聞は、地方新聞の雄として、東京や大阪の大新聞と、肩をならべるほどの勢力を持っていた。

「ありがとうございます。いきましよう」と二つ返事で承諾した。もちろん汽車はまだない。人力車がやっとできたところで、旅は悠長なものだった。熊谷、本庄、高崎、軽井沢、泊りをかさねて、六日目に長岡に着き、それから川船で新潟にくだった。

波止場には、新主筆のご到着というので、出迎えの人々が、しきりにキョロキョロ見回していたが、彼が船からおりると、「尾崎先生はおつきになりましたか」とたずねた。

「わたしが尾崎です」と答えると、みんな顔を見合せていたが、それでも不承不承、社に案内してくれた。あとで聞いてみると、「たぶん書生が上陸したんだらうと思って、先生は、と聞くと、その書生が、自分が尾崎だというから、びっくりしてしまった。福沢先生も大変な者をよこしたものだ。こんなものが主筆になって、新聞ができるかしら」と、互いにささやきあったというのである。

無理もない。自分は天下の尾崎をもって任じていても、まだやっと二十一歳になったばかりの、白面の青年だ。ことに体の小さい彼が、書生と見そなわれたのも当然である。

しかしよいよ社屋におさまって、筆をとってみると、案外に評判がよい。紙数もふえた。社の人たちも喜ぶし、彼の権威もあがった。

それはいいが、この男、口の方はまるでだめだった。若いといっても、主筆のことだから、毎日客は来るし、方々に招かれる。その応待にも、ただハアとかエエとか答えるだけで、挨拶もろくにできない。慶応義塾時代の無言修業が、まだ崇っていたとみえる。

もっとも彼は、今日は寒いか暖かいとか、天気が良いとか悪いとか、そんな千万人だれでも知っていることを、会う人ごとにくり返すのは、愚の骨頂だと思っていたのである。そのくせ気位だけは高かった。

それは県令・永山盛輝ながやまもりてるを主賓にした宴会の夜だった。いつて見ると、彼の席は末席も末席、一番はしに設けてあった。さあ、尾崎はおさまらない。「これは新聞記者を侮辱するものだ。もっと席をよくしろ」とさっそく世話人に談判をはじめた。

永山というのはよほど度量の広い人だったと見える。その後もそれを根に持つようなこともなく、彼によくしてくれた。

そのころの新聞は、今と違って、論説が中心であり、従って主筆が、編集全体を支配するしくみになっていた。尾崎は、それだけでは満足せず、最初から「新濁新聞総理」と署名して、営業方面にまで支配権をおよぼした。

ついには社長までかえさせたことがある。実に鼻息の荒いものだった。かねて彼は福沢先生から、出発前に「その地方を導くには、まず彼等の知識を開発せねばならぬ。単に新聞に書くだけでなく、演説会を開いて、目と耳の両方から、地方人を導かなければならぬ」といって、そのほか商事思想の注入とか、県会の指導とか、二十三カ条の心得を、巻紙にかきつけてもらっていた。

そこで新潟に来てからも、さかんに演説会を開いた。また一方では地方の有力な実業家にすすめて、北越興商會ほくくわうしょうかいというものをおこした。すすんでは附属の学校も建てるつもりだったが、まもなく急に新潟を去

「でもありませんが、これまでからのしきたりで……」

「そのしきたりがいかんというのだ。西洋では無冠の帝王」とよばれて、無上の権威を持つ新聞記者だ。こうした官尊民卑をあらためなければ、世の中は進歩しない」と、彼はどこまでも強情をはった。

するとこの押し問答を耳にした永山県令が、「それは面白い、こちらに移せ」といったので、鶴の一声、彼はやっと県令の隣に、席をとることになった。

しかし彼にしてみると、この県令の威張った言い方が、また気に入らない。宴たけなわにして、だいぶ酒がまわったころ、彼はいきなり立ちあがると、床の間のかざり花をもぎとって、「つつしんで敬意を表する」と、永山県令の頭の上や席上にバラバラふりまいて、さっさと帰ってしまった。

県令といえは、今の知事だが、廃藩置県まもなくのことだから、むかしの殿様ほどの権威を持ったものである。役人たちは「無礼者！ 尾崎の奴、ただでは帰せぬ」とたけり立って、ひと騒動起こさねばおさまらぬ形勢になったが、県令が「騒ぐな、ほっとけ」と笑っていたので、やっと事なく終わった。

ることになったので、これはただ有志をつのり、計画を立てるだけで終わった。だが、この学校も、彼の計画どおり、その年の十二月に創立され、のちに県立新潟商業学校になった。

そのうち新潟にも、県会が開かれることになった。何しろ初めてのことで、議事法など知っている人はいない。彼はかねて福沢から「県会の指導も君の大事な使命の一つと心得ろ」といわれていたので、その開設にも尽力し、開設後も書記という名ではたらいた。

ところが議場に入ると、書記の席が議長の下に設けてある。これは当然のことだが、たとえ名義は書記でも、自分では教師のつもりだから、承知しない。「議長と席を並べるのでなくては、とても県会の指導はできぬ」といいはって、とうとう書記席をつくらせた。大変な書記があったものである。

議長ぎぎの松村文二郎まつむらぶんじろうというのは、温厚で徳望のある君子人だったが、議長ぎぎの職務には全く不慣れであった。しきりに失策をする。おとなしすぎて、議場の整理ができない。尾崎は教師のつもりだから、見かねて議長に命令的に指図する。

あまりに議論がやかましくなると、「もうおやめなさい、散会なさい」と、散会させたことも、たびたびあった。時には彼が勝手に散会を宣告し、筆を投じて、どしどし議場を去ったことすらあった。

若気のいたりとはいいいながら、ずいぶん乱暴な書記があつたものである。当時彼の筆記した県会の議事録には「愚論きくにたえず」とか「この論とるにたらず」とか、いろんな評語が筆記のなかに書いてあり、その議事録は、珍物として、ながく保存してあつたということがある。

翌年の県会にも、彼は書記にあげられた。が、今度の山口権三郎という議長は、松村と違って、よほど厳格な人だったから、ちっとも彼のわがままを許してくれない。彼もこれはとてもいかんとあきらめて、すぐに書記をやめた。

そのころになると、再燃した自由民権の火が、天下を風靡しはじめていた。立志社から、四方に派遣された遊説員の声にうながされて、全国いたるところに政社がおこり、山雨まさに到らんとして、風楼に満つる形勢となつた。

こうして明治十三年三月、大阪で愛国社の大会が開た。

「立法や政治に関することを、天皇に請願する法規はまだないから、受け付けることはできぬ」

「すると人民は、天皇に請願する権利がないというのか」

「権利はある」

「では、その請願権をうばう法律はないのだから、当然受け付けるべきだろう。政府もかつて、請願を受理した先例があるではないか」

「しかし国会開設は、全国に関するものだから、一地方一部の人民が、請願すべき筋合いでない」

「それなら全国民が一致して請願したら、政府は受理するか」

「いや、許す許さぬは、天皇の裁断にある」

「請願を受け付けられないで、どうしてご裁断をおおぐことができるか」

「それは説明のかぎりでない」

こんな押し問答のすえ、却下されるのが常であつた。政府は何がなんでも、国会開設の請願をおさえつける決心だったのである。

かれた時には、二府二十二県にまたがる同盟の二十七社、八万七千余人の代表と称する百十四名が集まつて、いよいよ国会開設の願望書を起草し、河野広中と片岡健吉とが、委員として、天皇に奉呈することになつた。

ところが二人が太政官（当時の政府）を訪ねて、その願望書をさし出すと、「名は請願といい、嘆願といつても、こと立法に関するものは、元老院（当時の立法院）に提出すべきである」といって却下された。

そこで元老院にいくと「建白書でなければ受理できない」と、一言の下にはねつけられてしまった。

こうして二人は、太政官にいったり、元老院にいったり、いくどとなく強談判をくり返したのだが、どうしても願望書は受け付けられなかった。二人はとうとう堪忍袋の緒を切らし「よろしい、それではこの顛末を事こまかに報告して、全国の同志に訴えるだけだ」と、すて台詞をのこして、東京を去つた。

河野と片岡との報告書が、全国の世論を憤慨させたことは、非常なものだった。その後も全国の有志の間から、国会開設の請願のため、上京するものがひきもきらなかつたが、いずれもその目的をはたさなかつた。

尾崎は新潟新聞の主筆室で、こうしたことをきくたびに、皮肉の嘆にたえなかつた。この時勢の動きと、中央の風雲をながめては、雄心の大きい動くをおぼえ、一日もはやく、東京に帰りたくてたまらなくなつた。すると突然、矢野文雄から手紙が来た。

「近く国会が開かれる機運になつたについては、政府でも人材を入れて、その準備をすることになり、すでに慶応義塾出の俊才もだいぶ仕官することに決まつた。君もその一人に加えることにしたがどうだ」というのだった。

矢野文雄は当時「大隈参議の懐刀」といわれて、羽振りときかせていた。やはり慶応義塾の先輩で、尾崎も少しの間、矢野の教えをうけたこともあつたが、ほとんど記憶とどまらぬ程度だった。彼が矢野の名声をきいたのは、矢野が塾を去つて、報知新聞に筆をふるいだしてからであつた。こうしてこれまでほとんどなんの縁故もなかつた矢野が、尾崎を大隈に推薦したのは「尚武論」のおかげだった。

当時新潟新聞に対抗して、長岡に新聞がおこり、尾崎もさかんに筆陣をはって、これとほりあつたが、そ

ろそろ社説のたねが尽きかけたころ、例の「尚武論」を思いだして、十五日間ばかり連載した。するとそれが案外好評だったので、明治十三年に出版したところ、これまたよく売れて、東京方面からもだいたい注文があった。それを塾の先輩が読んで「あれは面白い。書いたのは誰だか、感心な男だ」と、彼を矢野に推奨したのであった。

ただ一つ、尾崎を躊躇ちゅうちゆさせたのは、役人ということであった。意地っばりの彼は、まだ福沢先生に啖呵をきった「学者自立論」にこだわっていたのである。

ところが矢野に会ってきいてみると、役所は統計院であったが、「ただの統計事務なら、局でたくさんなのだ。時勢の動きにうながされて、内閣のなかにも、国会開設論が起こり、大隈参議などは、明治十六年には国会を開きたいというので、すでにその準備にかかっている。国会が開かれれば、国務の説明をさせる政府委員が大勢必要になる。だから今のうちに、民間の人材を抜擢して、政府に入れ、二年の間、政務の練習をさせるのだ」ということであった。

これまで官職につくことなど考えたこともなく、また役人なんかになりたがる連中を、ひそかに軽蔑して

いた尾崎だったが、これなら役人は役人でも、ことわる筋はないと思つた。はたして出勤してみると、「君たちは将来、政府委員となつて、国会にのぞむのであるから、統計の事務なんかどうでもよい。国務全体の調査をしてもらいたい」というような訓示があった。こうして尾崎は、明治十四年七月、統計院ごんしのしょう権少書記官に任命されたのであった。時に二十二歳。なんの経歴もない尾崎を、いきなりこんな地位にすえるのは、非常な抜擢で、「これまでこんな年少の者を本官にしたことがない」と、彼の履歴書を見て、太政官ではだ**いぶ**文句があつたらしいが、それを矢野が無理に押しつけたのだつた。

（次号・第四章に続く）

第十三回「尾崎行雄（罌堂）杯演説大会」ご報告

「尾崎行雄を全国に発信する会」（神奈川県相模原市、天野望会長）が主催する「第十三回 尾崎行雄（罌堂）杯演説大会」が、十一月十四日に相模原市「杜のホールはしもと」で開催されました。

全国の子選を勝ち抜いた六名による熟弁が繰り広げられ、最優秀賞には波田大専さん（団体職員）の「IT農業による食糧自給率の向上」が選ばれました。

また今回は、地元神奈川県出身の小泉純一郎・元内閣総理大臣による記念講演「日本の歩むべき道」が行われました。

普選運動において尾崎の同志でもあつた祖父・小泉又次郎氏のエピソードや、憲政記念館の石碑「人生の本舞台は常に将来に在り」などについても語られ、大いに盛り上がりしました。

講演後は当財団からも尾崎行雄の著書『人生の本舞台』（二〇一四年復刻版）を贈呈する一幕がありました。小泉元総理は自らの講演でも尾崎行雄の言葉を引用される機会が多く、罌堂塾運営委員の高橋富代より書籍が贈られました。



小泉元総理による記念講演



罌堂塾の高橋運営委員が書籍を贈呈



国連の報告書、テロ対策での女性の役割に注目

二本の画期的な報告書が、ジェンダー平等そのものの実現を訴えるだけでなく、紛争の解決や暴力の克服、テロ対策、平和・安全の実現において女性が果たしうる、あるいは現に果たしている重要な役割を強調することで、世界市民の涵養に貢献している。

「経済・平和研究所」が「二〇一五年グローバル平和指標」で示しているデータによれば、紛争と暴力によって世界全体で一四・三兆ドル（世界全体の国内総生産の一三・四％にあたる）が浪費されているという。これは、カナダ・フランス・ドイツ・スペイン・英国のGDPの総額に等しい。

「世界は二〇〇八年よりも平和な場所ではなくなった」と同報告書は指摘している。状況を悪化させた指標は、得られた利益に注目している。

決議一三二五号は、女性の紛争経験を国際の平和と安全に結びつけた初めての宣言であった。決議一三二五号の履行状況に関する十五年目の報告書を準備する中で、潘基文国連事務総長によって委託された新しい包括的な報告書を独立の立場から執筆したラディカ・クマラスワミ氏は、この調査は「疑いなく」、女性を排除した場合に比べ、「平和プロセスにおける女性の参加がそのプロセスを長続きさせる」ことを証明していると述べている。

クマラスワミ氏は「決議一三二五号が採択された」二〇〇〇年以降、世界情勢は大きく変わったと認識しています。より積極的な対話を通じて、このアジェンダを復活させ前進させる必要があります。」と語った。しかし、国際社会と国連がこの状況にどう対処したらよいか分からないという曖昧な状況が存在する。

クマラスワミ氏は、紛争予防、早期警戒システムの性質、武装・非武装部隊の存在、対話の必要性といった報告書の主な内容を引き合いに出しながら、「今日の世界の軍事支出レベルはあまりにも高い水準であり、紛争が拡大するサイクルを止めなければなりません。」「武力行使は、対話が不可能な場合の最後の手段に限定すべきです。」と語った。

難民と内地避難民の数、内戦やテロの影響による死者数である。二〇一四年だけでも、二万人がテロによって死亡したと推計されており、十年前の年間平均二十千人からするとかなり増えている。

男性への従属を強いられ、過激なイデオロギーの対象になる女性によって、この一四兆ドルのコストのうちどれだけが担われているかは不明だ。また、過激イデオロギーの犠牲になった女性の数も、「二〇一五年グローバル平和指標」は示していない。

しかし、「女性・平和・安全保障に関する国連安保理決議第一三二五号」採択から十五年を記念して十月十三日に国連が発表したグローバル調査では、平和構築の取り組みにおいて女性をよりエンパワーすることによって

「現在の平和創出のモデルが機能していないのは明らかです。」と語るのは、国連ウイメンのプムジレ・ムランボ・ヌクカ事務局長である。

一九九〇年から二〇〇〇年の間に結ばれた和平協定のうち、女性に言及しているのは僅か一％にすぎない。国連安保理が決議一三二五号を採択した時点では、女性に言及した和平協定は二七％であった。二〇一四年中に国連が支援した和平協議や国民対話プロセスから生まれた六本の協定のうち、六七％が女性や平和、安全の問題に言及している。

にもかかわらず、一九九二年から二〇一一年の三十一件の主要な和平プロセスのうち、交渉人が女性であったのはわずか九％である。国連ミッションの部隊のうち女性隊員は三％に過ぎず、その大部分が支援要員である。「こうした状況は受け容れたい」とムランボ・ヌクカ事務局長は語った。女性が和平交渉のテーブルにつけば、その参加が平和実現の可能性を向こう十五年間で三五％増大させることになるだろう。

国連ウイメンの代表や、百ページに及ぶ世界的な報告書の主要著者らは、女性のエンパワメントは平和に貢献するだけでなく、経済成長を加速させ、人道支援を強化するとの見解で一致している。ムランボ・ヌクカ事務

局長は、「この十五年間の進展はあまりにも遅々としたものでした。」と指摘したうえで、「和平プロセスに関与する指導者の少なくとも半分は女性でなければなりません。」と強調した。

女性問題は依然としてアジェンダの最下位にあると、二〇〇八年に創設された「国連平和を求める女性協会」のムナ・リハニ・アルナセル会長は語った。同協会は、女性・女児に対する暴力の予防や、暴力に対抗する法や政策の履行強化の問題に取り組んでいる。また、「国連女性に対する暴力撲滅トラスト基金」の資金集めも行っている。

「諸政府に対して、女性問題を最優先の課題とするよう圧力をかけていかなければなりません。女性は、和平プロセスの議論に参画すべきです。女性は男性よりも平和に貢献できます。私たちは人口全体の五五%を占めているのですから。」とリハニ・アルナセル会長はIDNの取材に対して語った。

アルナセル会長は、警察官や裁判官、テロ対策の政策決定者として働く女性が今のところあまりにも少ないと考えている。「もし私たちが門戸を開放すれば、女性は関与してくるでしょう。女性は、適切な訓練を受け、平等な機会という意味において、男性と等しい取り扱いを受けるべきです。私たちは、状況がさらに悪くなるまで

グローバル調査報告書はまた、「資金は現場の女性に影響を及ぼすプロジェクトに対応しなくてはならない」と訴えている。アルナセル会長は、カリフの地位を名乗る過激主義集団ISIS（イラク・レバントのイスラム国）がマイノリティに対して行ったテロ行為を、激しく批判している。ISISは特に、ヤズィーデーの人々を攻撃対象としている。

イラク北部の、民族的・宗教的な少数派が住んでいるシンジャール山脈をISISの武装集団が二〇一四年八月三日に攻撃し勢力下に収めて以来、約三千人の女性や子どもが囚われていると考えられている。

ヤズィーデーは民族的にはほほクルド人で、イラクのクルド人地区（ドホーク、エルビル、スレイマニヤの各県）にほとんどが住んでいる。ISISの部隊は、イスラムに改宗しない人々を暴力的に攻撃し、非ムスリムのヤズィーデーに対しても虐殺を行っている。

パリ・イブラヒムさん（二十六歳）は伝統的なヤズィーデーの家族に属する若い法学生である。ドホーク県カンケ地区から九〇年代に逃げてきた。ISISが彼女の居住地区を攻撃してのち、彼女は、現在住んでいるオランダで「ヤズィーデー解放財団」を立ち上げた。

「現在のところ、ヤズィーデーのためにできているこ

座視していることを望みません。テロは人道に反するものであり、私たちも共に（テロと）戦わなくてはなりません。それは政府を通じて行うだけではなく、市民社会も積極的な役割を果たすべきです。」とアルナセル会長は語った。

紛争地帯の女性

「テロ行為を伴う紛争が勃発すると、しばしば女性と子どもが最も脆弱な立場に立たされ最大の被害を受ける。」とアルナセル会長は強調した。このことは、紛争地帯に生きる女性・女児が直面している現実を特集したグローバル調査の内容からも明らかです。」とアルナセル氏は語った。

通学年齢にもかかわらず学校に通っていない子どもの半分は、紛争地帯に住んでいる。初等教育における純就学率（調整後）が紛争地帯およびポスト紛争地帯では七七・五%にしかならない女児が、特に悪影響を受けている。

紛争国およびポスト紛争国では、妊婦死亡率が平均して二・五倍高い。世界の妊婦死亡のうち半分以上が、紛争によって影響を受けている国家や脆弱な国家で発生している。妊婦死亡率の世界のワースト十ヶ国は、すべて紛争国あるいはポスト紛争国である。

とは何もありません。多くの男性が殺され、女の子たちが性奴隷にさせられています。彼女たちの証言内容は恐ろしいものです。ヤズィーデーは殺されるか、イスラム教に改宗させられています。いったい何人が殺されたかという正確なデータは依然不明ですが、ISISが支配している地区のシンジャールには集団墓地が点在しています。」とイブラヒムさんはIDNの取材に対して語った。

ある推計値によると、ISISによって誘拐された女性・女児は五千人から六千人にのぼるといいます。それ以降、二千人が救出されたが、依然として膨大な数の被害者がこの過激主義集団の支配下に捕われたままとなっている。

イブラヒムさんは、「ISISから逃れてきた女の子たちにはトラウマが残っています。多くの医者は彼女たちをどう治療していいのかわからないのです。女の子たちは帰ってきてても、支援を受けられない状況に置かれています。これまでのところ、国際社会の反応はきわめて不十分と言わざるをえません。ISISを止めようとする真剣な取り組みがなされていないのです。」と指摘するとともに、世界的な行動の必要性を訴えた。

【ニューヨークIDN⇨ファビオラ・オルティス】

◇「罫堂塾ブックオブザイヤー2015」

「罫堂塾」では各分野のトップランナーやエキスパートを講師に招き、塾生に学びの場を提供していますが、罫堂塾のみならず政経懇話会、罫堂講演会などで登壇頂く講師の方々には優れた著作の持ち主でもあります。

罫堂塾では、各事業の講師陣や、憲政・地方自治に関わりの深い書籍をブックアップする「ブックオブザイヤー」を制定し、今年で二回目になります。

選考には次の三つの基準を設けています。①罫堂塾もしくは尾崎行雄記念財団にちなんだものであること。②憲政および地方自治の分野において、すぐれた著作であること。③上記の該当に関わらず、受賞にふさわしいと判断されたもの。

二〇一五年は、次の作品に賞を贈る運びとなりました。

◇大賞

『選挙ってなんだろう!?!』

(高村正彦／島田晴香著、PH P研究所)

『代議制民主主義』は、「有権者の成熟」に最適なテキストと言えます。「代議制民主主義はもはや過去の政治制度なのか」という争点を軸に、現代の政治システムが抱える課題と展望・提言が高く評価されました。

罫堂塾の講師として毎年登壇頂いている宮台真司・首都大学東京教授の最新刊『社会という荒野を生きる』は、近年の社会問題を広範囲にわたり独自の視点で批評する文体が評価されました。出演ラジオ番組のテキスト化ということもあり、話し言葉で軽快に進むテンポは今年の社会事象を総覧する意味で、「ブックオブザイヤー」の称号がもつとも相応しいという意見も寄せられました。

『危機管理の死角』、そして『新国防論』は、ともに軍事や国際紛争問題の分野で第一級の知見を持つそれぞれの著者の最新刊になります。

『危機管理の死角』は軍事やインテリジェンスの要素をベースに、一般企業におけるリスクマネジメントのあり方を検討する上でも有益な指標が多く示されている事が評価に繋がりました。

『新国防論』は、今年最大の話題となった安保法案

◇政治全般

『代議制民主主義―「民意」と「政治家」を問い直す』

(待鳥聡史著、中公新書)

◇社会・思想

『社会という荒野を生きる。』

(宮台真司著、KKベストセラーズ)

◇国際

『危機管理の死角』

(小川和久著、東洋経済新報社)

『新国防論 9条もアメリカも日本を守れない』

(伊勢崎賢治著、毎日新聞社)

『選挙ってなんだろう!?!』は、今年六月に可決された改正公職選挙法により、選挙における投票年齢が十八歳に引き下げられました。新たな有権者に向けての政治入門書として、尾崎財団の設立趣意でもある有権者啓発への期待から大賞に決定しました。

(平和安全法制整備法ならびに国際平和支援法)に対する、国際紛争問題の第一人者によるメッセージとして注目を集めました。とりわけ、自衛隊の国際活動に直接つながる国際平和支援法に関しては、国際法の視点から見た法制上の限界点や課題が独自の視点で語られ、日本の国際貢献のあり方に一石を投じる一冊であると高い支持を集めました。

ここに挙げたほかにも数多くの書籍がノミネートされました。詳細については尾崎財団ホームページでも紹介されていますので、是非とも皆様の読書ガイドにお役立て頂けると幸いです。



◇ 「尾崎罌堂記念館・特別展記念講演会」



「伊勢市制施行十周年記念・米国からのハナミズキ寄贈百周年記念事業」の一環として行われた特別展「憲政の父・尾崎行雄をめぐる人々」（主催〓伊勢市教育委員会、実施主体〓NPO 法人罌堂香風）。

その特別展の最終日（十一月二十九日）、伊勢市の「尾崎罌堂記念館」にて特別展記念講演会が開催され、当財団理事・事務局長の石田尊昭が「尾崎行雄の信念と生き方」の題でお話しさせて頂きました。

当日は、通路に席を設けても間に合わず、立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。憲政の父・罌堂こと尾崎行雄を半世紀以上にわたり国政に送り続けた有権者の熱気は今も健在でした。

「尾崎行雄の信念と生き方」（石田尊昭）

- ① 「返礼ハナミズキ百周年」にあたって
- ② 憲政記念館（旧尾崎記念会館）について
- ③ 尾崎行雄が目指したもの
- ④ 手段としての「2つのフセン（普選と不戦）」
- ⑤ なぜ今「尾崎行雄」なのか
- ⑥ 「人生の本舞台は常に将来に在り」

【訃報】

去る九月二十八日、当財団の役員を長年務められ、また事業活動へ多大なるご支援を頂いておりました大橋物産株式会社・前社長の大橋士乃武様が逝去されました。享年八十六歳でした。生前のご尽力に、当財団一同、深く感謝申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り致します。

世界と議会（第五七二号）

定価五百円

発行所 一般財団法人 尾崎行雄記念財団

〒100-0001 東京都千代田区永田町1-1-1 憲政記念館内

電話 〇三（三五八一）一七七八

ファックス 〇三（三五八一）一八五六

ホームページ <http://www.ozakiyukio.jp>

メール info@ozakiyukio.jp